

まちづくりビジョン策定委員会（第2回）会議録

■ 日 時：平成26年1月31日（金）午後3時05分～午後5時40分

■ 場 所：みなかみ町観光センター 2階 会議室

■ 出席者：

①まちづくりビジョン策定委員会（8／13名）

小林 洋、河合 生博、小野 章一、津久井 功、木村 孝弘、中島 エリ、
渡辺 一彦、本多 圭仁

②アドバイザー（1／1名）

平松 庚三

③事務局（3／3名）

まちづくり交流課長 宮崎 育雄、商工振興GL 小池 俊弘、主査 大川 志向

■ 配布資料

①会議資料

資料1 観光客数・消費額調査結果

資料2 みなかみ町観光振興計画（P13～23抜粋）

資料3 みなかみ町の観光に関する調査報告書（報道資料）

②参考資料

○ みなかみ町観光振興計画

■ 会議内容

1 開会

2 あいさつ

3 議事

（1）サイボウズLiveの運用について

事務局（サイボウズLiveについて、操作方法が説明され、運用ルールが確認される。）

- ・今後の会議の連絡や資料の配布は、原則電子データで行い、紙による配布は行わないこと。過去の資料もサイボウズLiveで閲覧可能であること。
- ・確認したコメントには、「いいね！」をつけること。
- ・アカウントのプロフィール画像の設定や、スマホ専用アプリのインストールを推奨すること。

（2）観光の現状の問題点について

平松 前回の会議でもすでに、広義のみなかみ温泉と狭義の水上温泉のブランドが差別化されていない事に発する問題や、テレビが報道するみなかみ地方の天気と他のみなか

み地域の実際の天気には差があり、顧客を混乱させている現状の問題が指摘されましたが、今日の会議では、みなさまそれぞれの立場から問題点を上げていただき、みなかみの観光について現状の認識と問題点の把握を行いたい。

平松 事務局で用意した資料（みなかみ町観光振興計画P22）に、みなかみ町の観光の強みと弱みがきちんと把握されているが、この計画は誰がどんな目的で策定したものか。みなかみ町で観光は最も重要なところだから、税金や時間をかけてこれだけの計画を策定したのだと思うが、こういう計画が1年前にきちんとできているのに、また同じことをするのかという危惧もある。

河合 この計画は観光だけを扱っている。委員会の目的からいくと、これはもちろん含まれるが、農業・商業・工業を含めた全体のものを策定していくべきではないか。

平松 その中でも観光が最も重要であるから、その時にこれは観光の部分として使えるところは使えばいいし、2度手間する必要はない。この計画を策定した時に、施策とかアクションは作らなかったのか。

事務局 計画書の46ページに掲載されている。

平松 この計画はなかなかよくできていて、我々にとっても財産である。これを利用して、ここは改善されている、ここはさらに悪くなっている、新たにこういう問題があるというのをもう一度みんなで検証して、一部を修正するのは必要だと思うが、計画でここまでアクションと責任団体を明確にしているのに、これを無視して我々が全く別のところで議論していいものなのか。やはり町政には継続性が必要だと思うし、他の部署でやっているから関係ないではなく。この計画がどうなっているのかという現状をお伺いしたい。

事務局 実際どのようなことをやっているのかが明確になっていない。計画では展開施策を示しているが、実際にはこの下にぶら下がる事務事業が必要。

平松 会社の経営も町の経営も同じだと思うが、こういう計画を作ってアクションプランがあれば、社長や町長が毎月でも進捗を確認するもの。どうしても作ることで目的になるような傾向が強い。

事務局 行政評価として一応評価はしているが、おっしゃるようなやり方できちんとした進捗管理はできていない。

平松 評価は誰がしているのか。

事務局 まずは自分（担当者、担当課）で行う。

平松 これを無視してやっていたら、町長に怒鳴り込まれるのではないかと。計画の進捗状況を、次回までにできる限りまとめていただきたい。

- 各委員から、それぞれの立場としての観光の現状と問題点が指摘される。

平松 観光という視点での問題点を、計画書26ページに掲載されている強みと弱みをベースにさせていただいてご発言いただきたい。

木村 月夜野地区ですから観光といっても上牧温泉くらいでピンとこない。観光というと水上地区と新治地区というイメージでギャップがある。

渡辺 水上地区でも直接観光ではない土木や教育などの産業があるが、観光がしっかりしないと外貨が入ってこないで、まわりまわって人口が増えない、税収も増えない、やりたいこともできないになってしまう。商工会にも飲食業、宿泊業、工業の人たちがいて、いつもこういうところでギャップが出てくる。なぜ観光が最初の今日の課題になっているのか意識しないとならない。

① 谷川岳・一ノ倉沢のマイカー規制の支障

中島 私の家は土合山の家という山小屋と谷川岳ドライブインをやっていて、雪山訓練やロッククライミングの先生にお泊りいただいている。強みとして谷川岳がロッククライミングの聖地であるとして書いてあるが、昨年マイカー規制により一ノ倉沢まで自家用車で行けなくなり、早朝に重たい機材をもって行けなくなってしまった。今までは景勝地に簡単に自家用車で行けたお客様が行けなくなってしまった。マイカーのお客様が怒って帰られる。代替車両も運行されているが、子供を乗せるのは困難。写真を撮る方も代替車両の時間では無理。全日を規制にするのではなく、車の往来が激しい時だけにしたらどうか。ロッククライミングや写真家のために、規制を解除する日を設けてもらいたいというのが個人的な意見。

また、マイカー規制をする場合に駐車料金がかかる。代替交通は今後無料にすると聞いているが、これまで無料で行けた場所にお金を払わなければならなくなり、腑に落ちない。町の無料駐車場があれば、そこを解放してあげれば親切なのではないか。

② スキーをする町内の子どもの減少

中島 谷川岳への子どもたちの登山が少ないし、スキー人口が減っている。学校でのスキーの時間が減っているからではないか。自分たちの子どもがスキーをしないことで、その子どもたちが大きくなってスキー客を呼び込めないのではないかという懸念がある。

③ 尾瀬はみなかみの観光資源

中島 水上から尾瀬へアクセスできるので、関西方面からの旅行者が長野や新潟を絡めて水上から尾瀬に入るケースが見受けられるが、大型バスは沼田市からしか行けない。昔は谷川岳でお客様が集まったが、今では首都圏の営業の方に、谷川岳ではと言われる。谷川岳と尾瀬の両方を訪れることは1泊すれば可能であり、尾瀬と谷川岳・一ノ倉沢をつなげて観光商品にできないか。また、照葉峡は紅葉・新緑の時期に景観がすごくきれいであるので、もう少しPRできないか。

④ 花を使った観光のプロモーション

中島 花の名所がみなかみには少ないのではないか。ノルンがすいせん、明川の桜、サンバードのコスモスもあるが、4～6月のシーズンで町がスキー場とタイアップするなど、観光的な花の場所があってもいいのではないか。梅雨の時期に雨が降ると行くところがないと言われる。

① 問題点の優先順位

渡辺 問題点を把握して明らかにすることは必要であるが、問題点がすべてイコールではなく、優先順位をつけたらどうか。例えば、脆弱な2次交通とあるが、設備や投資を考えると優先順位が1番に来るとは思えない。

② ハイシーズンとローシーズンの平準化

渡辺 今日配っていただいた、観光客数のグラフを見るとピークは8月だったり、1～3月はスキーの日帰り客が大半を占めていたりするのは明白で、平らにはできないかもしれないが、落ち込みを少なくするような施策がないと観光は伸びないのではないかと。月別の季節変動や週間の差をなくすことが弱みと言えるのではないかと。

このような状況にもかかわらず、イベントや行事が週末に集中してくる。祭りだとか花火大会など、飽和状態のところイベントをやって、人足をとられてしまったりは、サービスがおろそかになっているとも言える。リピートしてもらうためにも満足度を高めて帰してあげることが観光の中では一番重要なことではないかと。

① 冬季のアトラクションの開発

本多 私は新治地区で観光農業をやっているが、6月中旬のサクランボから始まり、12月中旬のリンゴまでのシーズンの間はいつお客さんが来てもいいように何かをやっているが、冬場が一番大変でほとんどの農家さんは収入がない。夏場をお願いしているおばさんも冬場は1回解雇している状況なので、パートさんも年を通して働きたいということになると次の年には来てくれない。

たくみの里も冬場は1/3くらいは店を閉めてしまう。もう少しお客さんが来てくれれば飲食店もやると思う。

平松 冬の仕事がないということは冬のアトラクションがないということ。たくみの里に限らないことだが、寒いことはひとつのアトラクションになる。夏は商品やアトラクションがあるので、何か新しい冬のアトラクションを開発できないかと。

② 高品質な農産物のブランド化

本多 農産物は高品質である。月夜野から新治のフルーツは非常に良いものが取れるが、ブランド化されていない（認知度が低い）ために、お客さんの理解が得られない（購買につながらない）。お客さんは、リンゴは信州・青森、サクランボは山形、コメは新潟魚沼産と思っている。

③ 農産物を使った加工品の開発

本多 農業はどうしても廃棄が出て、ほとんど捨ててしまう。お土産がないという話があったが、加工品に強く力を入れられると商品として出せたりできる。リンゴだけでなく野菜も同様。加工品と言ってもジャムなどではありきたりだと思う。

平松 オフィスが移転して、タイの尾頭付きのアップルパイをいただいたが、胡蝶蘭よりもよっぽどよい。これも新たな商品とすることもできるし、たくみの里で子供たちに加工品を作らせて持ち帰るということもできる。特に農産品には旬があるが、安定的に供給できる仕組みづくりが必要。

① 雪はみなかみの強み

津久井 東京でサッカーの仕事をしていると雪の上でサッカーをしたいという需要がある。雪がすごい強みである。

平松 みなかみと言えば雪であるが、雪のアトラクションがスキーしかない。雪の上でスキー以外のサッカーや雪合戦なども考えられるのではないか。雪合戦のようにみなかみを中心になってイニシアティブをとったらよい。

② 昭和のレトロな温泉街の復活

津久井 みなかみでは夜飲みに行けない。100mでもよいので昭和のレトロな通りがあって、浴衣や下駄で歩けるような魅力ある温泉街になるとよいと思う。

平松 みなかみは飲み屋がない。ところが沼田は全日本の人口比で一番居酒屋が多い。水上の旧道はそういう雰囲気はある。

③ 多様な温泉群のブランディング

津久井 強みとして趣が異なる多様な温泉群とあるが、実は弱みになっているのではないか。「みなかみ」と一括りにするといろいろあるが、どれが一番よいのかわからない。それぞれ役割が異なるので、お客さんが混乱しないように明確にする必要があるのではないか。

平松 それ自体の解決は難しいことではないと思うが、ブランディングの問題は、コンセンサスをとることが難しい。

④ 資源を活かしたブランドロイヤリティの向上

津久井 東京圏からのアクセスの良さや自然などの資源を活かしながら、多くの子ども達に訪れてもらい、将来にわたるファンをつくってはどうか。

平松 ブランディングの認知度だけでなく、ロイヤリティの方を高める施策はどうかということ。ブランドの認知度とロイヤリティ（そのブランドを好ましく思うのか思わないか）は別の話で、その両方を測らないとだめ。

① 成功するもしないも意識改革から

小林 テクニカル的なものとコンセンサス的なものがあって、意識的なものを改善していかなければならない。施策推進の中心主体が行政である以上、成功はないと思う。その意識が事業者や関連団体にならないと、結局絵に描いた餅になってしまう。

中島委員から一ノ倉沢の話があったが、時間はかかるかもしれないが、自然のものは無料だという意識も変えていかなければならないのではないか。

合意形成には時間もかかるし、面倒なことであって、これまでもそこを省略してしまったことが、行政が失敗を繰り返してきた原因ではないか。ビジョンは町への要望ではなく、我々も意識を改善して、答申後も進捗管理を進めていかないと、ビジョンが決まったらあとは行政に丸投げでは先に進まない。

平松 進捗管理は、アセスメント（客観的な評価）とKPI（重要業績評価指標）でやる必要がある。

① 観光のベースを担う農林業の深刻な衰退

河合 観光の素地をつくっているのは農林業であるが、農業を主体としてやってきた人たちが高齢化して、60～80歳くらいの人たちが農地環境を守っている現状。何百年もの歴史がこの40～50年で総崩れになっている。きれいごとでいろいろ言っているが、その辺をしっかりと考えないと、農家がどんどん撤退し、イノシシと猿の都になってしまう。現実には、800町歩の農地のうち200町歩は何も作っていない状態（荒廃地になってきている）。そんなことになってしまったらフルーツもリンゴもあつたものじゃない。荒廃地をいかにしたら農地に戻せるかを考えなければならない。観光というくりでやるのもよいが、一時のことを考えることであって、もっと根本的なことを考えなければならない。

平松 これは大変大きな問題であるが、日本の農業をダメにしたのは自民党と農協で、日本の農業を守るのではなく、農家を守ろうとしてしまった。それから問題なのは生産性の悪さで、みんな小規模なのに1台ずつ機械を持っている。800町歩を運営する農業法人を作らなければならないが、やるとなると利権が絡むので、それをできるのは行政しかいない。

① ニーズの変化と農商工の連携

小野 世の中が10年と経たず大変な変化をしていることを意識しながらやらなければならない。観光にしても、新幹線高速道路が空いて期待したが、なかなか人が集まらないのが現実。農業なり観光が連携をどのようにとっていけるかが基本になる。今までのものを同じく進めようと思っても、意識や遊びも多様化しているので過去を反省しながら進めなければならない。

(3) 次回委員会の開催について

○ 次回の委員会について、次のとおり日時と場所が決まる。

日時：2月14日（金）午後3時から

場所：観光センター2階 会議室

(4) その他

○ 平松氏より、市区町村職員人材育成プログラム「東京財団週末学校」について紹介される。

○ 平松氏より、ソフトウェア開発者が、一定期間集中的にプログラムの開発やサービスの考案などの共同作業を行い、その技能やアイデアを競う催し「ハッカソン」について紹介される。

5 閉会